

A 4 7 / 2 9

英語教材開発研究

— 新学習指導要領に対応した4技能の統合指導を目指して —

林 秀 俊 (岡山中学校・高等学校)

1. はじめに

外国語教育における視聴覚教材使用の有効性は古くから認められており、近年は ICT 機器を活用した英語教育に関する研究も数多く存在する。しかし、日常の授業での実践はまだ限られているため、今年度の研究対象学年の授業では、日常的に ICT 機器を使用することとし、使用する教材の開発研究を行った。教材の開発にあたっては、中学校では平成24年度、高等学校では平成25年度から実施される新学習指導要領で求められる英語の授業像を検討し、作成した教材が、新学習指導要領に対応した授業を具体化するために有効なものとなることを目指した。本稿はその実践報告である。

2. 2008年度版中学校・2009年度版高等学校新学習指導要領における改訂の要点

(1) 2008年度版中学校新学習指導要領における改訂の要点

2008年度版中学校学習指導要領では、現行学習指導要領で重点が置かれている「聞くこと」「話すこと」に加え、「読むこと」「書くこと」も含めて4技能の総合的な育成と統合的な活用の重視へと転換されている。

(2) 2009年度版高等学校新学習指導要領における改訂の要点

高等学校新学習指導要領での大きな変化は、科目構成の全面的な変更と、「方法」の部分に明記された、「授業は英語で行うことを基本とする」の文言であろう。文部科学省作成の表によると、現行のすべての科目（英語Ⅰ・Ⅱ、OCⅠ・Ⅱ、リーディング、ライティング）が、必修修の新科目「コミュニケーション英語」に統合され、特定の技能に焦点を当てた科目は消滅していることがわかる。現行の学習指導要領における英語Ⅰ・Ⅱの位置づけも「4つの領域の言語活動を総合的・有機的に関連させて指導する」科目とされており、4技能の統合という考え自体は以前からあったものだが、今回の改訂は統合化の流れをさらに加速させたものにとらえることができる。

新科目「コミュニケーション英語Ⅰ」の指導内容は以下のとおりである。

コミュニケーション英語Ⅰ

- ア 事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。
- イ 説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。また、聞き手に伝わるように音読する。
- ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。
- エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く。

3. 現状分析と目標

どのような授業を目指し、教材開発を行うか、勤務校における英語授業の現状を分析し、目標を設定した。

(1) 現状分析

① 4技能の指導について

音読：音読のバリエーション。多様な音読に取り組みたいが、大人数相手に思うようにできていない。

読解：和訳に頼らない授業の構築。訳読式から抜け出せない。

リスニング：効果的なリスニング指導。

スピーキング・ライティング：時間が無くプロダクションまで持っていけない。

② 授業全般について

生徒がさらに積極的に参加できるよう改善したい。

生徒の言語活動を保障しながら、学力と実践的コミュニケーション能力を高められる授業を実践したい。

③ ICT活用について

PCを積極的に使用したいが、設備不備のため思うように実現できない。

普段の授業実践における、ICTの自然で効果的な活用の可能性を模索したい。

作成したデータを蓄積し、継続して使用できるようにしたい。

板書代わりにあるいは黒板ではできない提示に使用できないか。

課題を提示して考えさせたり、学習への興味付けに用いられないか。

語彙の定着や速読演習に活用できないか。

文の構造などを説明するときに時間を短縮し、効果的に説明できないか。

(2) 目標

作成教材が生徒の注意を喚起し、言語活動のための時間を保証するものであること。様々な活動につながるものになること。生徒が直感的に理解できること。

4. ICT機器を活用した英語教材開発

(1) 実施校における教室状況と使用機器

勤務校にはCALL教室・LL教室は存在しない。実践は普通教室で行った。

図1が今年度の授業で使用した機器である。プロジェクターは1学年(1フロア・4クラス)1台の割り当てがあったので、キャスター付きのラックに乗せて授業教室に持ち運んだ。ラックにはパソコン(上段)・iPod+スピーカー(中段)も乗せ、授業時には教卓に乗せかえる。電源はすべて最下段のコードリールにまとめてある。



図1 授業使用機器

プロジェクターの発光量は4000ルーメンとかなり明るく、専用のスクリーンがなくても前のカーテンを閉めれば黒板に直接投影した状態での視聴が可能である(図2)。このおかげで投影した画像に板書もできるようになる。提示場所は黒板左隅に固定した。

パソコンを授業教室に持ち込む前は、iPod Dock コネクタからのビデオ入力端子（図3）を購入し、iPod からプロジェクターへのビデオ入力で、作成した視聴覚教材を提示していた。しかしこの方法では、パソコンで作成した教材を iPod 用のファイルに変換しなければならず、手間がかかること、また、一度作成した教材を簡単に修正できないこと、教材の提示方法（タイミング・繰り返し等）がパソコンと比べてかなり制限されることから、パソコンの使用に切り替えた。



図2 普通教室での黒板投影

(2) フラッシュカードの作成

充実した言語活動を行うためには語彙の増強は不可欠である。紙のフラッシュカードの代わりに、PowerPoint で作成したフラッシュカード（図4）を単語練習用に使用した。1秒で画面が切り替わるように設定する。



図3 iPodビデオ入力端子

設定は以下の通りである。

アニメーション→画面切り替えのタイミング→自動的に切り替え（1秒）→すべてに適用

従来のカード作成の煩雑さを大きく軽減でき、授業内での単語練習の絶対量は増加するが、定着度の低い単語をその場で並べかえ、重点的に提示すること等、紙のカードの方が優れている点も存在する。

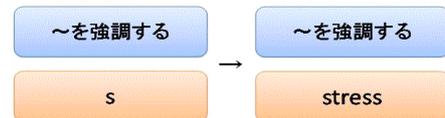


図4 フラッシュカード

(3)教材の作成

教科書本文のテキストデータは大半の教科書に附属している。教科書中のイラストもデジタルデータとして附属している場合もある。なければ、スキャナーで取り込めば PowerPoint で画像つきのダイアログを提示することができる。音声は CD から取り込む場合は挿入→ビデオとサウンドで行う。英文の提示パターンを変えることで、様々なタスクを与えて指導することができる。

以下の4つの提示パターンを試してみた。

(パターン1) 終了・ワイプ・オブジェクトクリック時開始

(パターン2) 強調・下線・オブジェクトクリック時開始

(パターン3) 文字の色・黒・強調・ブラシの色・白・オブジェクトクリック時開始（消去）

(パターン4) 文字の色・白・強調・ブラシの色・黒・オブジェクトクリック時開始（表示）

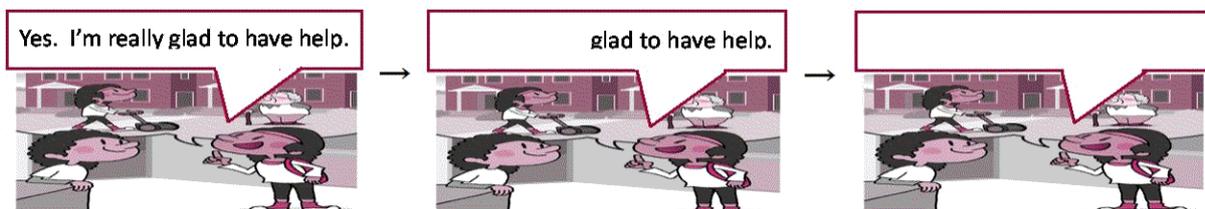


図5 ダイアログ音読用スライド

例えば、パターン3の設定では、文字は前から消えてゆく（図5）。アニメーションに沿って音読する活動や、文字が消えるまで黙視させ、白紙の状態でも再生させる活動などが効果的である。会話の続きを作るライティング活動から、白紙の吹き出しに合わせるアフレコ形式で行うスピーキング活動などにつなげることも可能である。

スラッシュリーディングの指導においても、スラッシュ付きのライド（図6）を準備しておけば、何度も説明する手間が省けるうえに、生徒は目で確認できるため、スラッシュの記入場所を間違えるといった単純なミスが減らすことができる。

このシートに手を加え、読んでいる箇所の部分訳を提示できるようにした（図7）。この場合は生徒やCDの音読スピードに合わせるため、ページ切り替えは手動にしておいたほうが様々なスピードに対応できる利点がある。

（4）その他

Officeのクリップアートや写真、インターネットからダウンロードした画像を提示することで、視覚的なイメージを理解や様々な活動の補助にできた。単純な画像で、インフォメーションギャップが設定しやすいものは教材化が容易であるのだが、教材化しやすい画像資料を選ぶ際の指針を得るにあたっては、英会話教材ロゼッタストーン（ロゼッタストーン・ジャパン社）が大きな参考になった。また、あらかじめwordで作成しておいた文法説明ファイルや内容関連ホームページなどへのハイパーリンクも、効率化や注意喚起といった面で有効であった。

5. まとめ

一過性のもので終わることのないように、1年間継続してICT機器を使い続けることを課し、週4時間の授業ほぼ全てで作成したデジタル教材を使用した授業を行った。継続して行った結果として、限られた時間の中で効果的に授業を進められたこと、生徒が前を向いて英語に触れる時間が飛躍的に増えたことに関しては、デジタル教材の使用が大きな助けになった。視覚に訴えることで4技能の統合指導に対する垣根は大幅に低くなる。教員も生徒も英語を使用しやすくなる雰囲気は使用前には感じられなかったものである。

デジタル教材の利点は、保存が容易なことと、改良に手間がかからないことであろう。今年度の実践で作成した教材はサーバに保存されており、次年度以降も、状況に応じた改良を加えて使用可能である。

コンピュータを教室に持ち込むことでもっと様々な言語活動が提示できるはずである。さらに充実した言語活動へ向けてICT機器を活用すること、またiPod等の携帯機器や、次回教科書改定時には次々に発行されるであろう中学校・高等学校用のデジタル教科書活用の可能性を探っていくことが今後の課題である。

6. 参考文献

- 伊藤治己（2007）『コミュニケーションのための4技能の指導』教育出版
 吉田晴世ほか（2008）『ICTを活用した外国語教育』東京電機大学出版局
 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領』東山書房
 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説：外国語編』開隆堂出版
 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』東山書房
 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領解説：外国語編，英語編』開隆堂出版
 望月昭彦ほか（2010）『改訂版 新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館

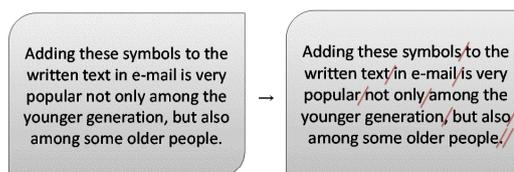


図6 スラッシュリーディング用ライド

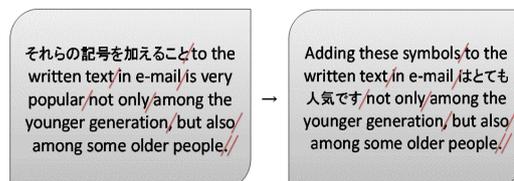


図7 スラッシュ+部分訳ライド